●せいてん質問箱

阿弥陀仏像のお姿の特徴は？

●質問●
阿弥陀仏像の姿には、どのような特徴がありますか。

□仏像前史□

まず、仏像制作の歴史についてお話しましょう。

仏像の制作は、釈尊が摩耶夫人のいる忉利天に昇り説法をした際に、優塡王が釈尊の不在を悲しみ、栴檀で仏像を造らせたことに始まると『増一阿含経』に説かれています。しかし、考古学的な調査から、釈尊在世どころか、釈尊滅後、数百年もの間、仏像が造られなかったことがわかっています。教えを聞き修行するという仏道において仏像が必須ではなく、また仏の功徳が形で表し得ないものとする考え方もあって、仏像は長い間、制作されなかったのです。

しかし、釈尊に対する人々の敬慕の思いは強く、仏塔の垣根や門には、釈尊の伝記等を主題とした彫刻がなされました。そこには当然、釈尊の姿を表す必要があったわけですが、それでも当初は釈尊を暗示する法輪・聖樹によって表現されるだけでした。その後、一世紀頃になり、ヨーロッパ文明の影響もあって、ガンダーラやマトゥラーといった地域で、仏の姿が図像化されるようになります。そして、一旦仏像の制作が始まると、瞬く間に仏像制作は広まり、仏教教義と緊密に関係しながら、豊穣な仏像文化を成立させていきます。

□阿弥陀仏像の起源□

二世紀に造られた阿弥陀仏像の足部と台座がマトゥラーから発見され、仏像制作の始まりから程なくして、阿弥陀仏像も制作され始めたことがわかっています。

また日本では、七世紀中葉、白鳳時代から阿弥陀仏像が制作され始めます。この頃の阿弥陀仏像は、私たちが普段見慣れているお姿ではありません。それでは、浄土真宗で用いられる阿弥陀仏像のお姿が、いかなる歴史の中で生れてきたのか、その造像の歴史を辿ってみましょう。

□仏の三十二相□

仏には、三十二相の勝れた特長があるとお経に説かれています。この特徴のうち、頭部が盛り上がっている肉髻や、身体から光が放たれている丈光相、眉間にある白毫相といった身体の特徴が、仏像には表現されています。これらは、阿弥陀仏像においても同様に表現されています。

□印相□

仏像を特徴付ける要素に手の形＝印相（印契、ムドラー）があります。印相とは「しるし」の意味で、手の表現によっていかなる仏さまか、仏が何をなされているかを表しています。

□白鳳～奈良時代□

白鳳時代に造像され始めた阿弥陀仏像は、奈良時代に入ると、造像の数が飛躍的に増えます。この時代の阿弥陀仏像には、立っている姿（立像）、左足を上にして足を重ねている結跏趺坐、座によっかかっている倚像といった様々な姿が見られます。

また、この時代の阿弥陀仏像には「説法印」や「施無畏与願印」が用いられています。「説法印」は、仏がジェスチャーをまじえながら法を説く姿を表すもので、両手が胸の前にあるのが特徴です。「施無畏与願印」は、諸仏に共通して用いられるので「通印」とも呼ばれ、両手の指を伸ばし右手を上げ左手を垂らす形態で、右手が施無畏を、左手が与願を表しています。

□平安時代前期□

平安時代が始まると間もなく、唐より帰朝した最澄（七六七―八二二）と空海（七七四―八三五）が活躍しますが、お二方とも、当時の最新の仏教である密教を日本に伝えました。曼荼羅を重要な要素とする密教は、仏像・仏画の図像について詳細な規定を行います。阿弥陀仏像も、その影響を受けて、この時代、多くが坐像になり「定印」（禅定印）というお腹の前で両手を重ねる印相が多くを占めるようになります。延暦寺常行三昧堂に見られるような宝冠を被った阿弥陀仏像も、密教の影響を受けて制作されたものです。

□平安中期□

平安中期には、貴族を中心とした浄土信仰が盛んになり、また念仏の教えが発展していく中で、阿弥陀仏像は密教から独立した仏像として再び制作されるようになります。その代表作の一つが、平等院鳳凰堂の定朝作阿弥陀仏像です。この像は密教的な要素を残しつつも、蓮池を前景として浄土の荘厳を表した鳳凰堂やそこに画かれた浄土図等からは、浄土往生を願う新たな浄土信仰の高まりを窺い知ることができます。

こうした気運は、『観経』に依拠した数多の来迎図・来迎像の制作に結びついていきます。これらの図像の特徴の一つが、両手とも親指と人差し指で輪を作り、右手をあげ左手を垂らす形の、私たちの見慣れた印相です。この印相は来迎像に多用されるため「来迎印」と呼ばれますが、浄土真宗では施無畏与願印の一つと考え、別名である「摂取不捨印」で呼称しています。

□鎌倉時代□

法然聖人や親鸞聖人が活躍された鎌倉時代は、浄土の教えが社会に浸透した時代です。そのため、往生人を見守る姿を表す見返阿弥陀仏像（禅林寺等）、説法の兆しを表す歯吹阿弥陀仏像（富山・浄禅寺等）、五劫思惟の姿を表す五劫思惟像（東大寺阿弥陀堂等）といった浄土教の特徴的な教えを具体化した阿弥陀仏像が制作されていきます。また、「安阿弥陀仏」という法名を持ち、浄土信仰を持っていたとされる快慶が、多くの阿弥陀仏像を造ったのも、この時代です。その「安阿弥様」と称される造像様式は一際すぐれたものであったため、後代の造像に大きな影響を与え、浄土真宗の阿弥陀仏像も、この様式を基礎としたものになっています。

□浄土真宗の阿弥陀仏像□

このように、歴史上、多様なお姿の阿弥陀仏像が造られてきましたが、浄土真宗のご本尊は、三十二相を基本とし、蓮台の上にお立ちになっている立像であり、頭光に四十八本の光芒があり、「摂取不捨印」の相を取るものです。この形像本尊のお姿は、名号本尊の徳を形像化したものであり、そのお姿の中には、『高僧和讃』に「弥陀の心光照護して　ながく生死をへだてける」（五九一頁）と説かれる、弥陀の極まりない救い、大悲の心が表現されているのです。

（教学伝道研究センター常任研究員
藤丸智雄）

☆阿弥陀仏像の具体的な特質については、次号にて、あらためてお答えいたします。